

一般社団法人 日本バウビオロジー研究会（BIJ）



第75回定例セミナー

板倉の庵小屋「方丈板倉 齋（さい）」の見学

概要：

2025年の日本建築学会大会は九州大学で開催されることに伴い、例年、当地でのセミナーを企画してきました。今回は「方丈板倉 齋（さい）」と名付けられた、新しい居住形式の提案としての、板倉構法のセルフビルドの庵小屋（3坪の小屋）を見学いたします。福岡県朝倉市の（有）杉岡製材所、社長で木挽棟梁の杉岡世邦氏の先代先々代から継ぐ山の思いを集めた建物です。

日時：2025年9月11日（木） 14:00～16:00

プログラム

ごあいさつ／趣旨説明 石川 恒夫（BIJ 代表理事）

おはなし 杉岡 世邦氏（木挽棟梁）—「齋」を建てるに至った思いと願い—

参加費：会員 2000 円（一般 3000 円）当日現地でお支払いください。

現地集合・現地解散（〒838-1514 福岡県朝倉市杷木久喜宮 888）

最寄り：バス停：杷木（はき）より徒歩 13 分

福岡空港・博多バスターミナル・西鉄天神バスターミナル より

「リムジンバス日田営業所行」「福岡～日田（ひた号）」あり（1 時間 30～45 分）

自動車：大分自動車道「杷木 IC」で降りて約 2 分（天神より約 1 時間）

申込：9月5日（金）までに bureau@baubiologie.jp 宛てにメールでご連絡ください。

先着 15 名とさせていただきます。



考案者 安藤邦廣氏による「方丈板倉 齋」の趣旨です。ご一読いただけましたら幸いです。

方丈板倉 齋（さい） 危機を生きのびる想像力、新たな生き方とすみか

安藤邦廣（建築家 日本板倉建築協会代表理事 筑波大学名誉教授）

2020 年 6 月 5 日

人類は生きのびるために大きな転機にさしかかっている。急速に拡大してきた大都市への集中から山野田園への分散が今始まる。それは密集閉鎖居住から分散開放居住への転換でもある。

20 世紀末から日本列島は地震、津波、噴火、台風、洪水と度重なる災害に見舞われている

その度に人と財が大都市へ集中することの危険性は指摘されてきたが、その拡大に歯止めがかかることはなかった大都市への致命的な打撃とはならなかったからである。

しかしながら新たな感染症の脅威は地球上のすべてに平等に降り注ぎ、むしろ大都市に容赦ない大打撃を与えたいまこそ大都市集中に歯止めをかけ分散居住を進めるときである。

その確かな第一歩として小屋、齋（さい）をつくり始める。

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず（方丈記より）。齋（さい）とは、ものいみ ある期間、食や外出などをつつしみ、心身を清めることおよびそのへやの意味なり。

齋（さい）は母屋を補い、あるいは働くために、あるいは楽しみのために、あるいはひきこもるためにあるいは災難から身を守るために、あるいは祈りと安らぎのために、母屋と離れてあるいは庭先にあるいは山中にあるいは海辺に建つ。その土地にあわせて容易につくれるよう、どこにでもある運ぶに軽いスギ材をもってつくり、組み立て解体自在な板倉構法となす

その大きさは方丈（3 m 四方）、屋根は茅であるいは樹皮であるいは土で葺く

その姿は里山のごとし、淀みに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しく留まりたるためしなし
世の中にある人とすみかと、またかくのごとし（方丈記より）。

今から 800 年前、平安時代の終わりの頃、京の都は地震、台風、竜巻、大火、飢饉と度重なる災難に襲われ、400 年間にわたって繁栄した平安京はあっけなく崩壊した。その有様に無常を感じた鴨長明は京都南部の日野山中に閑居隠棲して方丈記を記した。その閑居が一丈四方であったことにその書名の由来がある。自ら作事したこの小さなすみかに、長明の無常観と生き様が見事に表されている。

それから 400 年後の戦国時代、再び動乱の世の到来で、千利休は四畳半、小間の草庵茶室を考案し、戦乱で荒廃した社会と人の心に、救いと安らぎを求めた。その草庵茶室は数寄屋造りとしてその後の日本家屋の原型となった。

それからさらに 400 年が過ぎ、ふたたび大地震と大津波、台風と洪水と度重なる災害に加えて新たな感染症の脅威にさらされている。今こそ我々はこれらの先人の知恵に学び、新たな生き方とすみかを想像しなければならない。方丈板倉齋（さい）はその小さな一歩であるが、大きな危機を生きのびる想像力を呼びさますであろう。

おしらせ

日本バウビオロギー研究会は 2025 年 6 月 2 日、一般社団法人の認証を受けました。

今後一層、日本の地に根差した活動を展開してまいります。